

## 【論文】

## ゴーゴリとドストエフスキイ

## —гордостьの問題をめぐって

秦野一宏

『友人との往復書簡抜萃』（1847）のゴーゴリの語りのトーンに、同時代の多くの読者たちは深く自尊心を傷つけられた。人間が同じ人間に対して、あたかも神か使徒であるかのごとく謙抑を説き、さまざまな教訓を垂れる、—その傲慢さに腹を立てたのだ。ゴーゴリは狂気に陥ったという噂さえ流れた。『ステパンチコヴォ村とその住人』（1859）における『往復書簡抜萃』の頃のゴーゴリのパロディ化された姿を見ると、ドストエフスキイもそのような読者と意見を同じくする者であったように思われる。後年に至ってもどうやらその考えは変わらなかったようで、たとえば、1875年から1877年にかけての『作家の日記』のノートの中で彼は、『往復書簡抜萃』における「大言壮語」に触れ、ゴーゴリの「謙抑」は「道化の謙抑」であると書き記している<sup>1)</sup>。

しかしだからといって、ある種の評者たちが言うように、ドストエフスキイがゴーゴリの「モラリスト」としての側面を否定的に見ていたわけではない<sup>2)</sup>。ドストエフスキイは、ゴーゴリが自身の作家の顔を直接さらけ出して高踏的に語ったことに嫌悪を感じていたのかもしれないが、ゴーゴリの語った内容そのものに反発していたわけではない。社会評論の分野でのゴーゴリの力は、美学的な分野におけるよりもずっと劣るという前置きが付くとはいえ、チジェフスキイのように、『往復書簡抜萃』で述べられた思想が、のちにドストエフスキイに「思想家」としての「不朽の誉れ」をもたらすことになったと指摘する評者もいる<sup>3)</sup>。あるいは両者の結びつきはさらに強力なものだと考え、『往復書簡抜萃』においてゴーゴリはドストエフスキイの小説におけるすべての問題を提供したのだから、「われわれは『友人との往復書簡抜萃』からも出てきた」ともドストエフスキイは

言えたはずだ、と語るゾロトゥースキイのような評者もいる<sup>4)</sup>。

ゾロトゥースキイの言葉には幾分、誇張があるかもしれないが、私もまた、ドストエフスキイは、『往復書簡拔萃』においてゴーゴリの取り組んだ問題の多くを引き継いでいると考える。その中でも何より重要なのが、おそらくは гордость をめぐる問題である。

### 1. гордость をめぐる 3 本の線

ロシア語の гордость (ゴールドスチ) は、英語の pride と同じく厄介な言葉で、「誇り」というポジティブな意味と「傲慢、高慢」というネガティブな意味を併せもっている。文脈しだいでは時として、二つの意味は厳密に切り離せないこともある。

ゴーゴリからドストエフスキイへは、この гордость にからめて、少なくとも 3 本の線が引ける。第一の線は<生理学もの>を介してのもので、出発点は『外套』である。

爪に火をともしような生活を続けやつのことで得た新調の外套をアカーキイ・アカーキエヴィチは強盗に奪われてしまう。彼は勇気をふりしぼって区の警察署長に訴えに行くがらちがあかない。その後、同僚の忠告もあって「有力な人物」のところへ決死の面持ちで陳情にゆくが、請願書も出さずに自分のところへ来るとはどういうことかと叱りとばされてしまった。動揺したアカーキイは寒気の中を口をぽかんと開けて歩くうちに扁桃腺を冒され、寝付くことになったが、結局回復することなく、あっけない最期を迎える。ゴーゴリはアカーキイ・アカーキエヴィチを通して、これまで目にも留められなかった、周囲からの侮辱にさらされているちっぽけな人間のちっぽけな世界を、同情を込めて<リアル>に描き出した。ロシアの生理学ものの作家たちやドストエフスキイも彼に追随した。「われわれはみな、ゴーゴリの『外套』から生まれてきた」というドストエフスキイが語ったとされる言葉は、そのあたりの事情を示すものなのだろう。ただドストエフスキイは、ちっぽけな人間に同情するゴーゴリや生理学ものの作家たちの上からの<ヒューマニズム>をそのまま受け入れたわけではない。人間を何か人間以外の生き物のように、時にはモノのように扱うゴー

ゴリたちに反発し、ドストエフスキイはジェーヴシュキン(『貧しき人々』)を通してちっぽけな人間を、自分が周囲からどのように見られているかをつねに意識する自尊心をもった人間として、あるいは、貧しさを卑下することのない「誇り гордость」をもった人間として捉えなおした。

しかし、読み方によれば『外套』は、生理学ものの作者たちが解したものとは似ても似つかぬ作品である。新調の外套を奪われるという不幸が、「皇帝やこの世の支配者たちを襲う不幸」と比較されているのは、故なきことではない。この比較に滑稽化のための単純な誇張以上のものを読みとれば、＜ヒューマニズム＞という言葉では覆いつくせない、まったく違う作品が現れる。

日頃は同僚たちから何をされても文句一つ言わず、ひたすら浄書という単調な仕事を繰り返すだけの機械のようなアカーキイが、必要に迫られてのことであつたにせよ、ぼろ外套を買い換えることに絶大なる情熱を燃やした。彼を衝き動かす力の大きさは、チーチコフ(『死せる魂』)を「引きずる」金儲けへの情熱に匹敵する。情熱に支えられ、生涯で初めて彼は、未来を生きるようになる。未来に実現するであろう一つの目的のために、極限的な窮乏生活もあえて引き受けた。金を貯めるために靴底が減らないように歩き、なるべく下着も洗濯屋に出さないようにした。このような目的のある生活によって、彼の性格も大きく変わる。新調の外套という「永遠のイデー」はあたかも生涯の伴侶のごとなり、アカーキイはこのイデーを食みつづけることで精神的成長をとげた。新外套が出来上がった時には、生涯で初めて過去を振り返り、現在との差に苦笑いする。かけがえのないものを手に入れたおかげで世界は広がり、自身も強くなった。だからこそ、新調の外套を強奪された時には、直に勅任官である「有力な人物」のもとに嘆願しに行き、口ごもりながらも必死の思いで、外套を探し出してほしいと訴えることができたわけだし、願いがあるなら手続きを踏めという有力な人物の言葉に逆らい、秘書官などはあてにならないなどと、大それたことが言えた。それはもう、かつてのおとなしい性格からは想像もつかない激しい言葉である。実際、官吏社会におけるヒエラルキー内の関係の破壊が起きているのだから、これはもう反逆だと言ってもよい。有力

な人物が、いったいどこからそんな「精神 дух」をもってきたのかと、その「向こう見ず буйство」を責め、足を踏みならしてどなりつけたことも頷けないことはない。この「精神」は、有力な人物からすれば、まさに上に歯向かう「傲慢な」精神である。その後も死に際にすら、うわごとで「閣下」を罵り、毒づいたアカーキイ・アカーキエヴィチだが、死んでも死に切れなかったのか、彼は幽霊になる。そして幽霊になってさえも「有力な人物」に代表されるエライ人間、あるいはエライ人間をエライと認めさせている秩序そのものに立ち向かった。これはジェーヴシュキンたちの гордость をもってしてはなしえなかった＜大きな＞反逆である。

このアカーキイ・アカーキエヴィチの гордость は『貧しき人々』を超えて、第2の線を形づくる。その線はのちにドストエフスキイが言う、不公正に対する「問い質しと抗議」としての「гордость 傲岸さ」に繋がるものである。ドストエフスキイによれば、この「傲岸さ」は、優劣を意識することから来る卑しい「гордость 傲慢さ」ではなく、不正や悪徳となじむことのできないもつとも「潔癖な感情 целомудрие」に由来するものである<sup>5)</sup>。その「傲岸さ」を持つ者の代表は、聖像を胸に抱いて窓から飛び降り自殺をするクロトカヤ(=「おとなしい女」)だ。彼女は、精神の自主的な降伏を望む質屋の妻育成のシステムに反逆する(この反逆は質屋からすれば、おそらく「傲慢」なのだろう)。聖像は神とともにある自身の正しさの象徴である。

『罪と罰』のソーニャの義理の母親カテリーナ・イワーノヴナの例は、切実な訴えに耳を傾けない無情な権力者への反逆という点で、よりアカーキイに近いかもしれない。カテリーナの亭主はアル中で働かない。病身の身で小さな子どもたちを養わなければならない彼女は、断腸の思いで義理の娘を街娼にする。すると、あろうことか、亭主は娘が身を売って稼いだ金も酒代にしてしまう。さんざん家族を苦しめたあげく、この亭主は酔って馬車に轢かれて死んでしまうが、もちろん、そんな男が金を残してくれるはずもなかった。悲惨な状況に追い込まれている彼女たちに救いの手をさしのべてくれる者はいない。罪もない子どもたちの野垂れ死にを恐れる彼女は、かつての夫の上司に助けてほしいと懇願するが聞き入れてもらえ

ない。もはや頼る者のいなくなったカテリーナは世界の公正を求め、神に正義を訴える。しかし、神は応えてはくれない。死の直前にはその神をも見限り、聞き入れてもらえなければそれでもいい、自分には罪はないのだと言い捨てるのである。ナスターシャ・フィリポヴナ（『白痴』）もクロトカヤたちと同種の「傲岸さ」を持っている。幼い頃から自身を囲い者として育て上げた大金持のトーツキイに対して、彼女は少しもひるむことなく立ち向かった。彼女は結婚の代償にロゴージンのもってきた大金を平然として燃やすことができたし、金目当ての結婚をもくろむガーニャに、暖炉で燃えかかっている金を素手でとったら、金はすべてあなたのものだと言ったのけることもできた。

こうした流れの中の *гордость* は、<ちっぽけな人間>という枠を超え、どんなに大きな力でも縛ることができない人間という存在そのものの尊厳の問題を提起する。

ところで今、第2の線上にある者として女性ばかりをあげたが、男性はどうだろう。たとえば、子どもの無事の苦しみを盾に、神の世界があつたとしても、その入場券はお返しすると言ったイワン・カラマーゾフの「反逆」はどうだろう。あがなわれることのない子ども苦しみを思いやっている姿にスポットライトを当てれば、たしかにイワンも第2の線上に位置する者として理解できる。しかし、結局のところ、彼の最大の関心はあがなわれることのなかった彼自身の苦しみなのだ。苦しむ子どもや人類愛は、あたかも自身が味わわなければならなかった不当な苦しみの隠れ蓑のような役割を担わされている<sup>6)</sup>。彼の *гордость* はクロトカヤやカテリーナと同じものではない。ドストエフスキイは明らかに、この *гордость* を「傲岸」ではなく、「傲慢」として扱っている。イワンはクロトカヤたちのいる第2の線上ではなくもう一つの線上、第3の線上にいるのである。

イワンが線上にいるこの3本目の線は『外套』ではなく『友人との往復書簡抜萃』から、『罪と罰』を筆頭とするシベリア流刑後の諸作品へと引かれる線である。

ドストエフスキイは監獄（「死の家」）の中で、民衆を卑しい者として上から見下ろす貴族出身のポーランドの政治犯たちの傲慢さにやりきれなさ

を感じた。そして<暗愚な>民衆を啓蒙してやろうと考えていたかつての自分の思い上がった姿をそこに重ねあわせもした。この「死の家」体験を通じて得た新たな гордость への関心によって、ドストエフスキイは『外套』のゴーゴリだけでなく、『往復書簡抜萃』のゴーゴリにもつながったのである。

## 2. 19 世紀の гордость — гордость の変質

「傲慢さ」の問題そのものは、いつの時代でも、どこの国にでもある。キリスト教でも仏教でも傲慢であることを戒めている。日本でも、法華經の教えを奉じていた宮沢賢治は、現代世界にはびこる「慢」にとりつかれてしまっていた自身を明確に意識し、世界救済を念頭にその「慢」の除去をめざした。しかし、ではいつの時代でも、どの国でも「傲慢さ」の内容あるいは質は同じかという、必ずしもそうではないだろう。たとえば『往復書簡抜萃』の中でゴーゴリは、ロシアでは 19 世紀に入って「傲慢さ гордость」は明らかに変質したと書き記している。

ゴーゴリによれば、かつての「傲慢さ」は「子どもっぽい ребяческая」傲慢さ、肉体的な力に由来する傲慢さ、富に由来する傲慢さ、生まれと身分に由来する傲慢さ等々であったが、それが現在では、おそらく「精神的なもの духовное」として発達してきている。

この「精神的な」現在の「傲慢さ」は二つに分けることができると彼は言う。

一つは、潔白であるという思いに由来する傲慢さ<sup>7)</sup>。19 世紀の人間は自身を高みに置き、過ぎ去った過去を睥睨する。自分に夢中になり、自身の潔白さと美にほれこむ。自分自身を他の人間よりも素晴らしい者、高貴な者と考え、「同胞」であることを忘れ、自分以外の人間を辛らつに裁く。自分だって「異なった形」ではあっても、また「公然たる不名誉を蒙らない形」であっても、同じ卑劣なことをなすうるのだということが「現代」においては忘れられてしまったのだと、ゴーゴリは嘆く。

もう一つは、さらに強力な知の傲慢さ<sup>8)</sup>。

ゴーゴリに言わせれば、本来「知」とは、秩序を保つための整理の道具

であり、いわば警察のようなものであるが、絶対的なものではなく、それ自体危ういもので、情熱には到底たちうちできない。にもかかわらず、西欧の圧倒的な影響を受けた 19 世紀のロシア人はみな疑うことなく、こぞってこのような危うい知性を、絶対的なものとして崇拝する。しかもその知性は傲慢である。西欧派とスラブ派の論争も、自身の『往復書簡拔萃』に対するベリンスキイの烈しい批判もゴーゴリに言わせれば、その根っこは知性の「傲慢さ」にある。西欧派は近視眼的であり、スラブ派は全体を見ているが、目の前のものを見ていない。どちらも「傲慢の精神 дух гордости」に囚われている。

ゴーゴリはまた、この 19 世紀の二つの гордость を、愛をめぐる「19 世紀の大きな問題」と結びつけて考えている。

『往復書簡拔萃』の中で彼は次のように述べている。19 世紀は、人類の幸福に関する思想がほとんどすべての者の好む思想になった世紀であるが、にもかかわらず、人は人を愛せない。19 世紀の人間、なかんずく西欧化したロシア人の根源的欠陥は、頭の中で全人類を「兄弟」として愛せても、一人を「兄弟」として具体的に愛せないことにある。

「19 世紀の人間が抱擁できるのは、自分を侮辱しなかった者、知らない人、会ったことすらない人だけだ。そのくせ、19 世紀の人間は自分のことを人間好き、博愛家だと考えている<sup>9)</sup>」。

19 世紀人は、ヒューマニズムという＜美しい観念＞を愛しさえすればもう、自分は不幸な人を心の底から愛していると信じこんでいる。彼らは、自身の嘘に気づかない。自分で自分を騙している。だからこそ、ゴーゴリは彼らの＜美しい＞自己イメージを揺さぶるために、マニーロフ（『死せる魂』）を通して、言葉づかいや見かけだけは感じがいいが、情熱の欠けた甘ったるい自称ヒューマニストの姿を思いきって戯画化したのである。

面白いことにドストエフスキイもまた、隣人を愛せないという点に 19 世紀の大きな特徴を見ている。ただ、決定的に違うのは、そのことをゴーゴリが作者の口から直接語っているのに対し（マニーロフたちには自己を

客観化する能力が付与されていないので語れない)、ドストエフスキイは作者の立場からバイアスをかけ、知識人の登場人物たちに語らせていることである。

「どうすれば身近な人間を好きになれるのか、おれは一度だって理解できたためしがない。おれに言わせると、身近な人間なんてとうてい好きになれる、好きになれるのは遠くにいる人間だけ、ってことになる(…)人間を好きになるには、相手に姿を消してもらわなくちゃいけない。そこでちょっとでも顔を出したら、そのとたん、愛なんて雲散霧消してしまうのさ<sup>10)</sup>」(『カラマーゾフの兄弟』— イワン)。／「人間というものは隣人を愛するということが生理的にできないように創られているのだ。(…)『人間に対する愛』は、きみ自身が自分の心の中で創った人類というものへの愛、したがって、実際には存在しないであろう人類というものに対する愛だと理解する必要がある<sup>11)</sup>」(『未成年』— ヴェルシーロフ)。

知はいつも自身の周りをまわり、他へ架けられるべき愛の橋を壊してしまう。知(ум)が、隣人を愛せよというキリストの訓えを否定するのだ。人類というイデーは愛せても汝の隣人をおのれのごとく愛せない。— このこと自体はドストエフスキイ自身も語っている<sup>12)</sup> (「1864年のノート」)、そしてドストエフスキイもまた、ゴーゴリと同じく、隣人を愛せないその原因を「傲慢さ гордость」、わけても「知」の傲慢さに見てとる。ただ、ドストエフスキイにとってさらに重要な問題は、わかっていてもどうしようもない事態、あるいは、自分には責任がない、致しかたないことだと開き直る登場人物たちの姿勢にある。引用したイワンとヴェルシーロフの言葉は、ゴーゴリが『往復書簡抜萃』で語っていることを真理であると認めるものであるが、認めても彼らは改めようなどとはまったく思わない、—そこに彼らの傲慢さがある。彼らには、善あるいは幸福よりも「真理」の認識、より正確に言えば、「真理」に関する知識こそが重要なのである。さらに傲慢な輩になると、改めることなど、愚かなことであると見做すようになる。たとえばスヴィドリガイロフは、人を愛するなどという非論理的



ことは、バカのすることだと考えている。あるいはその裏返しになるが、ドストエフスキイの描いた人物の中には『おかしい男の夢』の主人公のように、おのれのごとく他を愛せというキリストの訓えこそが現代の最重要事で、この訓えを実行しさえすれば、それだけでも人間は美しく幸福になれるのだという考えにゆきついた者もいる。この男は実際、ゴーゴリのように自分の考えをストレートに主張して、仲間から嗤われ、狂気のレッテルを貼られることになった。

人々のこうした根深い反発を見越しているかのように、ゴーゴリは、19世紀特有の傲慢の精神に取りつかれた者たちは例外なく、自分は賢明で、決定的に、全面的に正しいと信じ、ほかの者は、決定的に、全面的に間違っていると信じていると述べている<sup>13)</sup>。

<正しさ>はドストエフスキイにあっては、<健全さ>に置き換えられる。自己不信の極致である絶望を死にいたる「病」だと定義づけたのはキルケゴールだが、ドストエフスキイは絶望の対極にある全面的な自己信頼もまた、病であると見做した。自身を全面的に正しいと信じる者はまた、自分こそが「健全」であると信じる者である。1877年の『作家の日記』(12月号)でドストエフスキイは、かつて自分は、「自分自身のことを健全だと見なしている人々が、じつは病んでいることを長編小説や中編小説で暴露したことがある<sup>14)</sup>」と書き記しているが、ここで「暴露する обличать」などというものものしい表現を使わねばならなかったのは、彼が、この「病」には病識がないと考えていたからにはほかならない。

ドストエフスキイによれば、多くの人々はまさに「健全さ」によって病んでいる。ここで言う「健全さ」とは、「自分の正常さへの度外れの自信」、言い換えれば、「時に自分の無謬性を確信するほどの恐ろしいうぬぼれ、破廉恥な自己陶醉」を意味する。この「健全さ」とは言い換えれば、まさに「傲慢さ гордость」である。自身の知性に自信満々のラスコーリニコフやスヴィドリガイロフ、スタヴローギンは、自身の「健全な理性 здоровый рассудок」を信じてやまない。「[自分は殺人を]馬鹿者[дурак]ではなく賢明なる者[умник]としてやった。そしてこのことが、わたしを破滅させた<sup>15)</sup>」と、老婆殺害後にラスコーリニコフは語る。殺害計画の遂行

後、彼を苦しめつづけるのは、自分が「偉大な人間」として犯罪を持ちこたえられなかったことではなく、「偉大な人間」なら殺人を犯す権利を持っているという自身の論理の過ちを見出せないことである<sup>16)</sup>。この傲慢な「論理」を捨てずにいる限り、ラスコーリニコフは自殺するか、それとも罨にかかって成功を逃した「卑劣漢」として、おめおめと生き延びるしかない。

「傲慢の精神」、— ゴーゴリに言わせれば、これこそ「悪魔 дьявол」の正体である。この悪魔に操られた「知の情熱」の行き着く先を彼は次のように描き出す。すなわち、思想の世界で違う考えを持っていれば、それだけで人は敵対する。敵対すると党派が形成され、相手側に非を認めたくないとの理由だけで「悪意」をおぼえ、互いに争うようになる。19世紀の人間は、そもそも悪意などというものは、教育によって追い払ってしまったと信じていたのだが、悪意は消え去ったと思ったまさにその時に、今度は知性という道をたどってやってくる。雑誌に乗り、悪意はバッタの大群のように襲い掛かる。そしてそのうちに「知に代わって純粋な悪意だけが支配する」ことになる<sup>17)</sup>。

このような「知の傲慢さ」の増大、拡散してゆくイメージは、ゴーゴリ同様、ドストエフスキイにおいても共通する。たとえばラスコーリニコフが獄中で見た「旋毛虫」の夢を取り上げてみよう。「人間の体に巣くう極微の生きもの、新しい旋毛虫のようなものが出現した。だがこの生きものは知と意志を与えられた精神 духи であった<sup>18)</sup>」。この「旋毛虫」に取付かれると、人は「悪魔憑き бесноватые」のようになって、これまでなかったほど自身のことを頭がいい、真理を発見したと思い込む。そして人々は互いに、「なにかしら無意味な悪意」を持つようになる。— ゴーゴリは「純粋な悪意」と言い、ドストエフスキイは「無意味な悪意」と言うが、純粋さと無意味さはこの場合、ほとんど同義だと言ってよいだろう。傲慢な知は、善とは何か、悪とは何かという根本問題の解決を不可能にし、最終的にはわけのわからぬ「悪意 злоба」の支配を招く、というその考え方は、両者においてまったく同じである。ことは考え方だけにおさまらない。知に代わる「純粋な悪意」と「無意味な悪意」、—このような表現の細部にい

たるまでの類似は驚くべきことではないだろうか。ゴーゴリのドストエフスキイへの影響などと軽々しく言うつもりはないが、『罪と罰』を書くにあたってドストエフスキイがゴーゴリの『往復書簡拔萃』の一節を参考にしたか、あるいは細部が無意識的に記憶に残るほどに、『往復書簡拔萃』を深く読み込んでいたか、そのどちらかであることは疑いあるまい。

ドストエフスキイはさらに、ゾシマ長老（『カラマーゾフの兄弟』）にも、傲慢な知のおぞましさを語らせている。

「もしキリストの約束がなかったら、彼ら〔知力のある人々〕は地上の最後の二人になるまで、たがいに滅ぼしあうことになる。事はそれで終わらず、この最後の二人は、その傲慢さのためにたがいに相手に我慢ができず、ついには最後の一人が残りの一人を滅ぼし、その結果自分自身をも滅ぼすことになるだろう。おとなしく謙虚な人々のおかげでこのような事態は収まる、というキリストの約束がなければ、それはその通りになっていただろう<sup>19)</sup>」

諍いの恐ろしい勢いでの拡がり、人々の悪意、悪魔憑き、世界の滅亡、— こうしたイメージから紡ぎだされるドストエフスキイの想像的未来図は、悪魔は「傲慢の精神という本来の姿で、仮面なしでこの世に現れた」と語るゴーゴリの＜現代世界＞と重なる。知性は「聖なるもの」であり、人々は自分の「知性」が嘲笑されることだけはけっして許さない。知にとりつかれた人々は知性以外、何ものも信じない。「知性が見ないものは〔この世に〕存在しない〔も同然だ〕<sup>20)</sup>」とは、「19世紀の人間」の特徴を語るゴーゴリの言葉であるが、この言葉は、まさにスヴィドリガイロフやスタヴローギンたちのいびつな「健全な理性」を想起させる。

このいびつな（「聖なる」）「健全な理性」は、自身を絶対化するために、すでに社会に受け容れられている＜聖なるもの＞を排除する。たとえばスタヴローギンによれば、「健全な理性」は、「心の広さ *великодушие*」と相容れないものである。スタヴローギンは、キリーロフを「心の広い」人間だと認める。これは『悪霊』創作ノートという言葉を使えば、キリーロフが

自己犠牲という「民衆的イデー」をもっていたことを意味する。ところがスタヴローギンは、キリーロフの「心の広さ」を認めながらも、それがあつたのはキリーロフには「健全な理性」がなかったからだ述べている。великодушные によって示される自己犠牲的な感情は、隣人を愛することと同様、「知」を絶対視するスタヴローギンたちにとっては憐れむべき狂気、あるいは理解不能なナンセンスなのである。ゴーゴリは「19 世紀の人間」が、人類全体に対しては「心の広い великодушное」抱擁を行う用意があるにもかかわらず、人類の「一人」に対してはそれができないことを嘆いているが、ドストエフスキイの知性人たちにとっては、「心の広い」抱擁ができないことはもはや嘆きの対象ではなく、むしろそうあらねばならない積極的な意味をもっている。

ゴーゴリが知性の「傲慢さ」に言及する時、その知性は西欧伝来のものであると強調されていた。ゴーゴリ同様、ドストエフスキイにとっても、西欧と傲慢さは切り離すことができない。『冬に記す夏の印象』(1863)は、1862 年の 2 ヶ月半のヨーロッパ旅行の産物であるが、ここで繰り広げられるヨーロッパ批判、合理的エゴイズム批判はまさに「傲慢な精神」そのものに対する批判でもある。ドストエフスキイはここで、「威厳ある」西欧の象徴としてロンドンのシティ、水晶宮とともに、万国博覧会の巨大な書割を取り上げ、次のように述べている。

「この巨大な書割を作り出した強力な精神がいかに傲然としているか、この精神が自身の勝利、成功をいかに傲然と確信しているかを見れば、あなたたちはその傲慢さ、強情さ、盲目さかげんに怖気立つにちがいない。この傲慢な精神 гордый дух に感染し、支配されている人々に対して、怖気立つにちがいない<sup>21)</sup>」

西欧伝来の＜傲慢な精神＞への批判は、ゴーゴリ、ドストエフスキイの思想の核となる。両作家ともに、この傲慢な精神が妨害するために、人は隣人を愛せないのだと考えた。人間には本来、絶対的に正しい者などいないという考えも両作家に共通するものである。さらにいえば、現代人の誰

もが罪を犯しているという考えもまた、両者に共通するものである。ゴーゴリによれば、その最大の罪とは「間接的な罪」で、その罪を犯す原因は「不注意、傲慢さ、自己過信」、つまり自身の罪が見えないところにある(『往復書簡拔萃』第20章)。一方、ドストエフスキイは、ゾシマ長老や長老の兄、あるいはミーチャ・カラマゾフに、＜誰もがみんなに対して罪がある＞と語らせている。みんなに対し罪があるとは、誰もが自身の重い責任から逃れられないということだ。おそらくこの思想は、「すべては許されている」と語るイワン・西欧的知性の具現者—の傲慢な、＜無責任な＞思想の対極にあるものなのだろう。

### 3. ゴーゴリとドストエフスキイの相違

さて、これまで「傲慢な精神」をめぐるドストエフスキイとゴーゴリの共通点に焦点を当ててきたが、今度はその違いを考えてみたい。

ゴーゴリは＜19世紀の傲慢さ＞というテーマで小説を書かなかった、あるいは書けなかった。しかし、たとえゴーゴリが「傲慢な精神」を小説のテーマとしたとしても、ドストエフスキイが示したような知識人は登場しなかったであろう。ゴーゴリに知識人が書けないからということではない。結局、傲慢な知はゴーゴリにあっては、大衆人、大衆社会と結びつく。ゴーゴリが見るところ、だれもが自分をひとかどの者と思っている「大衆社会」が、傲慢の行き着く果てだ。— この世界には、自身で理論を構築し、その理論に則りながら、自分はナポレオンか虱か、人を殺害する権利があるのかどうか、などと真剣に自問する住人はいない。ゴーゴリは「知性」の傲慢さを批判しはするが、彼の小説に、高度な、苦悩する自意識過剰の知識人が等身大で出てくることはない。チーチコフを諭すムラーゾフやコスタンジョーグロには＜信念＞はあるかもしれないが、苦悩があるとは思えない。ロシアに関する浩瀚な著述を計画しているだけの怠惰なテンテトニコフは、「高度な」知識人と呼ぶことはできないだろう。コシカリョーフの書棚には西欧の哲学書がぎっしりと詰まっているが、どうやらそれらを読み込んだ形跡はない。彼は西欧の知性をありがたいものだ、わけもわからず崇拜する、軽佻浮薄で滑稽な人間として示されているだけだ。ゴー

ゴリの目からすれば、テンテニコフもコシカリョーフも「深い眠り」に落ち、魂を干からびさせている。

『往復書簡拔萃』で言及される知識人はもう十把一からげに、「裁縫女や、仕立屋やあらゆる職人」として登場する。専門分野しか知らない科学者は大衆人の典型だと、オルテガは述べている<sup>22)</sup>が、ゴーゴリの知識人も広い視野をもてない「職人」なのである。

部分的にしか知識がないのに、自分は全体を知っていると思っている者たち、西欧の書籍や雑誌に載っていたことを受け売りしているだけなのに、何か高尚な使命を果たしていると勘違いしている者たちが、ゴーゴリの考える傲慢なる人である。「思想も率直な信念もない、誰にも知られない、無知蒙昧な人々が聡明な人々の意見や思想を支配し、すべてのものに虚偽と認められる新聞紙が、それを尊敬しない人間の無感覚な立法者となっている<sup>23)</sup>」。— このような傲慢な知性(=「悪魔」)が支配した世界は、「憂愁に燃え、退屈で、空虚なものになりつつある」と、ゴーゴリは憂う<sup>24)</sup>。

ドストエフスキイの場合は、そうした大衆社会的なイメージももちろんなくはないが、彼の関心は、高度な知識人の苦悩、哲学的な色合いを帯びた苦悩である。人類に愛を示すには哲学に励むよりも、牛肉の値段があがらないように骨折って奔走することのほうがてっとりばやいと豪語し、ミーチャやイワンの「思想」を嗤うラキーチンのような人物は、ドストエフスキイの世界では、副次的な役割しか持たされていない。

西欧的知性の問題はドストエフスキイにあっては、切り離され、孤立した「私 я」、あるいは分裂した「私 я」の問題に収斂してゆく。この分裂の恐ろしさをドストエフスキイはヴェルシーロフの口を通して次のように語っている。

「まるであなたのそばに、あなたの分身が立っているようなんだ。あなたは賢明で、ものの道理がわかっているのだが、あなたのそばにいる分身がどうしてもなにか愚にもつかぬことや、ときにはひどく陽気なことをしたがる。すると不意に、これはあなた自身が、この陽気なことをしたがつているのだということに気づく、だがなぜあなたがそんなことをしたいの

かさっぱりわからない、つまり、なんというか、いやいやながらあなたは望むわけだ<sup>25)</sup>」

このようなぶきみな分裂が引き起こされることになる大きな原因は、自分は「賢明でもものの道理がわかっている」という自負にある。この自負が強すぎるために、賢明な「わたし」は衝動的に愚にもつかないことをしたがるもう一人の「わたし」を理解できない。自身を賢明だと意識する傲慢な「わたし」は、愚かな「わたし」を自身に組み入れ、統合することができないのだ。

問題はこれだけにとどまらない。ヴェルシーロフの話し方に注意すれば、「わたし」はさらにもう一人いることがわかる。彼は、自身のことを話しているのだが、「わたし」という主語を使わず、まるで一般的なことを話すかのように、「あなた」を用いる。この「あなた」には、分裂してゆく「わたし」のありさまをたえず他人事のように観察し、分析している『わたし』が潜んでいる。この『わたし』は、なにやらすべてを＜科学的に＞観察し、分析できることを自負しているかのようだ。しかし、スヴィドリガイロフやスタヴローギンを想わせる理念のないこのような観察、分析は自己満足以外に何も生み出さない。その先が行きどまりであることは当人も知っているのだが、ヴェルシーロフたちは分裂の危機にありながら、『わたし』を手放すことができないでいる。西欧伝来の傲慢な「知」の根深さが窺い知れる。

人間は本来、愚かな存在であり、自分もまた愚かな人間の仲間なのだと、心の底から感じる事ができれば、言い換えれば、「知」の傲慢さを捨てることができれば、少なくとも、ヴェルシーロフたちの味わったような悲劇的な精神の分裂は起こらなかっただろう。このような認識のもとで造形されたのが「白痴、バカ（=идиот）」のムイシュキンであった。

ドストエフスキイは自身の傲慢な知にとりつかれた人物たちの源流を、プーシキンのアレーコ（『ジプシーたち』）やオネーギンに見た（ゴーゴリは言葉では書き残したが、傲慢な精神の体现者を描かなかった）。「我らの

もとを出でよ、傲慢なる人よ／我らは野の民、法はもたない／人を苦しめ、責めることはない」— これは『ジプシーたち』の一節だが、このような「傲慢なる人 гордый человек」は、ドストエフスキイによれば、ピョートル大帝の大改革後、200 年を経たその始まりの頃に、民衆と民衆の力から分離したわがインテリ社会に出現した<sup>26)</sup>という。ドストエフスキイに言わせれば、「傲慢さは彼らの抽象性と、彼らが大地から離れたことによる直接的で論理的な、避けがたい結果なのである<sup>27)</sup>」。抽象性、大地から離れたこと、民衆から離れたこと、— これが、ドストエフスキイの考える傲慢さの原因である。愛を抽象的にしか考えられなくなってしまった世界をゴーゴリは「知の傲慢」と関係づけたが、民衆との関わりによって傲慢さを考えることは、ゴーゴリにはなかった。

ゴーゴリでもドストエフスキイでも、絶対的な範はイエス・キリスト（ひいては神）に求められる。そこに違いはない。ゴーゴリ、ドストエフスキイ両者の差を決定づけるのはキリストに繋がる地上の範である。ゴーゴリの場合は知の傲慢さによってカオスと化した大衆化した社会が生まれるわけで、彼はこのカオスから脱出するために「支柱」を、そして「秩序」を求める。そしてその支柱となり、確固たる秩序を生み出すために地上の範となるのは、上に立つ者（地主・貴族あるいは地位ある者）である。そしてその場合の上下の関係は「父と子」の関係になぞらえられる。「上の方」で誠実であるように努力すれば、「下の方」は「すべておのずから」誠実になるでしょうという言葉が、上から下への影響というゴーゴリの考え方を象徴的に物語っている<sup>28)</sup>。

一方、ドストエフスキイにあっては善きものは下（大地と結びついた民衆）と結びつく。

ベリンスキイは「ゴーゴリへの手紙」の中で、「ロシアの民衆は尻を搔きながら、神の名を唱える<sup>29)</sup>」と、ロシアの民衆の無信仰ぶりを語っているが、「死の家」以後のドストエフスキイはまったく違った捉え方をする。たとえば彼は『悪霊』のシャートフに、「ゴーゴリへの手紙」（1847）を書いたベリンスキイをこう酷評させている。— ベリンスキイはロシアの民衆を見て見ぬふりをした。「手紙」からわかることは、「博物館に行っても象



の姿は見逃して、フランスの社会的な小さな虫にばかり目を向けてきた」ということだ<sup>30)</sup>。

傲慢な知識人は民衆の神を信じられない。しかし神は、民衆にこそ宿る。これが「死の家」をくぐりぬけたドストエフスキイの認識であった。同じく『悪霊』に登場するピョートル・ヴェルホーヴェンスキイは、まるでドストエフスキイを代弁するかのよう、外国で安楽に余生を送ることばかりを考えている<民衆の味方>カルマジノフを揶揄して言う。ロシアの民衆はさんざんひどい目に合わされながらも、自分の神を守り抜いてきたが、貴族の著名な知識人カルマジノフには守り抜けなかった、と。しかし、このように知識人を嘲笑うピョートル自身もまた同じ知識人の一人で、民衆の神を信じるところか、狡猾にもその神を<偽の皇子>スタヴローギンにすりかえようと画策するのだ。

ドストエフスキイは、真の知識人はシニスムという傲慢の角を折り、キリストの教えを、抽象的にではなく、民衆を通して、あるいは民衆と寄り添いながら得るべきだと考えていた。

## 5. 「傲慢さ」からの脱却の試み

最後に「傲慢さ」からの脱却という、より実践的な問題について述べておきたい。

「知 *ym*」によって思いつかれたものはみな粗すぎて、貧しい者には助けにならない、「知」は「叡智 *мудрость*」にまで高めなければ、実際的な力とはならないと、ゴーゴリは語る。知は情熱の嵐に巻き込まれると、盲目になってあらぬ方向に走り出す。結局情熱を抑えこもうとすれば、「理性 *разум*」が必要で、さらに「理性」を方向づけるためには、より高度な「叡智」が必要になる<sup>31)</sup>。そしてこの叡智は、「生まれながらのものとしては、我々の誰にも分け与えられていない。我々の誰もが生まれながらの賢者ではない<sup>32)</sup>」。この「叡智」はゴーゴリによれば、書物からではなく、自身の体験した悲しみ、自身の体験した苦しみを通して得られるものである(ちなみに<哲学者>カントが晩年呆けてしまったのは「知」はあったが、「叡智」が欠けていたせいだとゴーゴリは見ていた)。

ドストエフスキイもよく似たことを考えている。ドストエフスキイは知の支配する人間の自然と、それとはまったく異なる神の自然を峻別する。ドストエフスキイによれば、人は、キリストの認識を通して、神の自然に近づくべく、人間の「自然」に抵抗しなければならない<sup>33)</sup>。とはいえキリストを認識することも「自然」への抵抗も、抽象論に囚われた知識人にとってはたやすいことではない。そこでドストエフスキイが持ち出すのが、「民衆的理性 народный разум」である。知識人が自身の隣人を愛するためには、この「民衆的理性」が不可欠であると彼は考えた。

傲慢を「深い眠り」の一種と見るゴーゴリは覚醒を促すために、「衝撃」（「みなの方の見ていた前での公然たる平手打ち」）が必要だと見做した。実際『往復書簡抜萃』の出版の意味もまさに、読者に衝撃を与えることにあったのだ。人々は若干、自尊心が傷つくかもしれないが、結局は自分の意図するところを理解し、寛容に許してくれるだろうと彼は高をくくっていた。あなたの本からは地獄の風が吹いてくる、などと酷評されるとは予想だにしていなかった。

病の効用というようなこともゴーゴリは考えた。ロシア人は病がなければ、もっと派手に「跳躍したい」という思いに駆られ、気取ってみたいと考える。「やりきれぬ病の苦しみがなければ(…) わたしも自分を大した人物だと感じたことだろう」と、ゴーゴリは『往復書簡抜萃』で語っている<sup>34)</sup>。この病の効用をドストエフスキイは、ムイシュキン像の造形に利用した。病はドストエフスキイにあっては、他の人間の苦しみへの透入の門である。死期を意識するイポリートの心がいささかなりともほぐれたのは、ムイシュキンが、自身の病によって人と切り離される孤独を知っていたからにほかならない。またムイシュキンは自身の病のおかげで、子どもたちを過剰に管理する大人の傲慢さから逃れ、子どもたちと自然に心の交流ができたのだし、病のおかげで、傲慢へと誘い込む人のおもねりを避けることもできたのである。

検閲で削除された『悪霊』の「スタヴローギンの告白の章」が示すように、ドストエフスキイはその傲慢さからの脱却の可能性の一つを罪の「告

白」において探ったこともある。しかし、「告白」の効果は微妙で、そこに＜真＞の懺悔がともなわなければ、これほどの告白ができるまでに勇敢な我を見よ、と叫ぶ傲慢さを呼び起こすことになる。あるいは告白する本人がいくら真剣でも、告白を受け入れる側の問題がある。人々への「告白」にこだわるよりも、修道僧になって時間をかけ、功德を積みとは、チホンを通じてドストエフスキイがスタヴローギンに勧めようとしたことであるが、告白の危うさをドストエフスキイは十分に認識していたのである。『往復書簡抜萃』が当時の読者の多くに受け容れられなかったのは、まさに彼らがそこに、「偉業 подвиг」を当て込んだ傲慢なスタヴローギンの告白を読みとったからにはほかならない。ゴーゴリももちろん、その危うさを意識はしていた。しかし、その非難の声は彼の想像を超えていた。心の中に修道院をもてと呼びかけるゴーゴリは実際、自身も俗世間から遠ざかり、時間をかけて魂の浄化に努めていたのであるが、いくら努めても、笑いの作家という定着したイメージを読者から拭い去ることはできなかったのだ。あるいは言葉というものの本来的な性格もある。いくら「真正の」言葉で語っていると信じていても、いくら調子を変えてみても、言葉というものについてしまった手垢は、ちょっとやそつとではとれないのだ。＜誇り高い（傲慢な？）＞読者との溝は埋まらなかった。

純真な子ども時代を思い起こせ、「子どもらしさ」を忘れるな、という呼びかけも二人に共通するメッセージである。傲慢な人間は「幼き日」を失くしてしまった。すべての人を一つの家族に集めるこの「天使のような幼き日」や「輝ける素朴さ」を取り戻すすべはないものかとゴーゴリは嘆く。一方、ドストエフスキイは小説の中にメッセージを入れ込んだ。『罪と罰』のラスコーリニコフの子ども時代の夢、『カラマーゾフの兄弟』のミーチャの餓鬼の夢、この夢の世界、無意識世界から＜子ども＞は傲慢な大人たちに向かって自身の＜小さなこぶし＞を突きつけてくる。この＜子ども＞はゴーゴリ、ドストエフスキイともに、聖なるもの、キリストの姿、あるいはドストエフスキイの言葉を借りれば、「肉化した言葉」と結びつく。

ゴーゴリもドストエフスキイも、一生涯、自らを生徒であると考えてるよ

うに説いている。「友よ、自らを生徒・徒弟以外のものと考えないように。学ぶためにはもう年をとりすぎているなどと思わないように<sup>35)</sup>」、「全世界が教師であり、どんなつまらぬ人でも人の教師となりうる<sup>36)</sup>」とゴーゴリは言い、ドストエフスキイはムイシュキンの口を通して、「子ども」のほうが「大人」を教えてくれるのだと語っている。どちらにあっても教える者と学ぶ者は状況に応じて入れ替わる。永遠の未完成、これ完成と言ったのは宮沢賢治だが、この言葉はゴーゴリやドストエフスキイの口から出ても何等ふしぎではない。

思考を停滞させるあらゆる思い込み、自分はすべてを知っている、自分は完全に精神的に健康だという思い込み等々、このような傲慢な思い込みに対して、多くの処方箋が出された。ゴーゴリとドストエフスキイで共通するものもあれば、まったく違うものもあるが、結局のところ、こうした思い込みの問題は無意識のうちに＜絶対に正しい＞と受け入れていることの再検証に、言い換えれば「傲慢な」思考の中心点をいかにずらすかということにかかっているように思われる。一言でいえば、広い意味での「謙抑 смирение」のすすめということになる。

『往復書簡抜萃』の「謙抑」を「道化の謙抑」だと揶揄したドストエフスキイだが、彼自身もまた、「謙抑であれ、傲慢な者、何よりもまず、傲慢を打ち砕け。謙抑であれ、無為の者、何よりもまず、故郷の畑で働くがいい<sup>37)</sup>」と、謙抑を呼びかけている。『往復書簡抜萃』に似た危ういトーンであるが、言わんとすることは明確である。汗を流す肉体的労働こそが、「民衆的眞実」と「民衆的理性」による傲慢な知識人への彼の対処法なのである。

もちろん、ゴーゴリも「傲慢な知」に「謙抑」を対置した。すでに述べた病の効用についても、「謙抑ということに思い至らせてくれる」とゴーゴリは語っている。この謙抑はけっして「道化の謙抑」ではない。ラザレフが指摘するように<sup>38)</sup>、ゴーゴリの「謙抑」とは、ドストエフスキイやベリンスキイが思い込んでいたような、あるいは一般的にキリスト教的と思われるような従順さではなく抑制、自己支配、「情熱 страсть」に対する権力、なканずく、放恣な「知の情熱」を抑え込む絶大な「力」である<sup>39)</sup>。

ゴーゴリにあってもドストエフスキイにあっても、謙抑は傲慢さの処方箋である。もちろん、謙抑という方法によっては世界の変革などはないという見方もある<sup>40)</sup>。なるほど、ムイシュキンの結果的に、ロゴジンによるナスターシャ殺害などの悲劇を防げなかった。しかし、これはあくまで外側からみた話である。「謙抑は大いなる力である」とはイポリートの伝えるムイシュキンの言葉だが、じっさいこの力は人の心を知らず知らずの間に変えてしまう可能性をもたされている。黒から白へと一挙に変わるということはありえないにしろ、エウゲーニイや拳闘家など、ムイシュキンと出会った人たちの多くは、程度の差はあれ、明らかに変わってきているのだ。一方、ゴーゴリも『往復書簡拔萃』や『作家の告白』あるいは1840年代の書簡の中で、謙抑の精神による「魂」の変革、「再教育」こそが自身の最大の関心事なのだと繰り返し、語っている。謙抑を内的変革の力と見做す、— この大枠においてはゴーゴリとドストエフスキイは共通するのである。

しかし、謙抑が内的変革の万能薬であるかといえ、ことはそう簡単ではない。傲慢なる「知」もまた絶大な力をもっている。「キリスト教的な謙抑の影も、彼の知性の傲慢さゆえに彼に触れることができない<sup>41)</sup>」とゴーゴリは、19世紀の知識人のしたたかさをこぼす言葉をもらしている。その言葉を証明するかのように、イポリート(『白痴』)は、デカルト伝来の「我あり Я есмь」を盾に取り、「謙抑」は個としての自覚をもてない「無邪気な人々」の専売特許だと、ムイシュキンに反発する。知性を信奉するドストエフスキイの登場人物たちは多かれ少なかれ、謙抑に対し同種の思いを抱いている。

ドストエフスキイにあってはさらに、この「謙抑」の受け入れを阻むもう一つの力、すなわち抑えきれない＜私＞の「激情 порыв」が問題になる。

多くの人であれば、他人に助けを乞いたくないと思っている。たとえ自身の苦しみから他の苦しみを察する、真の＜共苦 сострадание＞の精神から出た思いやりであっても、思いやられる側に、自分は憐れまれている、同情されているという思いを引き起こす。そしてその思いが臨界点に達すると、時に相手に感謝しつつも、制御できない「激情」に追い込まれる。

たとえどんなに苦しくとも、自分は自分自身でありたいという思いに苛まれるのだ。そこにはマカール・ジェーヴシュキンたち、「貧しき(=不幸な)人々」の人間としての「誇り」の問題が関わってくる。「他人のもとに助けを求めることは何としても(…)したくない。(…)自己の苦悩に誇りさえ感じながら自分を保とうとする」、—このような自己への固執をキルケゴールは「絶望して自分自身であろうとする絶望—傲慢」と名づけた<sup>4 2)</sup>。イヴォルギンやナスターシャ・フィリポヴナがムイシュキンの美しさを感じ得しながらも、彼の「憐れみ жалость」、あるいは救いをほとんど受け入れながらも、最後に一転して拒んでしまうのはこの「誇り高い」、あるいは「傲慢な」(いずれも гордый) <私>の「激情」のためである。人の苦しみに透入するやさしいムイシュキンには、「激情」に走らざるをえないイヴォルギンたちの гордость を切り捨てることはできない。彼にはなすすべがないのだ。

ゴーゴリにあってもドストエフスキイにあっても、гордость の問題は最終的には解決されぬまま、残されている。あるいはそれは、解決できる問題なのかどうか、という疑問もなくはない。

## 注

- 1) Достоевский Ф.М. Полн. соб. соч. в 30 томах. «Наука». Т.24. Л., 1982. Стр.305. 以下、本全集は『ドストエフスキイ 30 巻全集』と略記する。
- 2) たとえば、次のフリードレンジェルの論考を参照されたい。 Фридлендер Г.М. Достоевский и Гоголь. - В кн.: Достоевский: Материалы и исследования. Под.ред. Г.М.Фридлендера. «Наука». Л., 1987. Стр. 18-21.
- 3) Чижевский Д. И. Неизвестный Гоголь. - В кн.: Гоголь: Материалы и исследования. Под.ред. Ю.Манна. «Наследие». М., 1995. Стр.217. その思想の主要な具体例として彼は、「全生活の教会化」、「宗教性のない文化は衰退、退廃に向かうことを運命づけられている」という考えなどを挙げている(同上)。
- 4) «Искусство одалилось от божественного идеала». Интервью с литературным критиком и биографом Гоголя Игорем Золотусским. 22 / 10 / 2002. <http://www.pravoslavie/guest/zolotusskij.htm>.
- 5) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 23 巻、35 頁。ゴーゴリもまた『往復書簡拔萃』の中で「自分自身への高い見解」(=傲岸さ、誇り гордость)に触れ、「それがなければ、人は自己を分析したり、批判したりすることもできないし、自身の無学無知を洗い出してとがめることもできない」のだと述べている(Гоголь Н.В. Полн. соб. соч.

- в 14 томах. Т.8. АН СССР. М.-Л., 1952. Стр. 257. 以下、本全集は『ゴーゴリ 14 巻全集』と略記する。)
- 6) 詳細については、次の拙稿を参照されたい。「ドストエフスキイにおける子ども—『カラマーゾフの兄弟』をめぐって」(海上保安大学校「研究報告」第52巻2号、2008年3月)。
  - 7) 『ゴーゴリ 14 巻全集』第8巻、412頁を参照。
  - 8) 同上、413頁を参照。
  - 9) 同上、411頁。
  - 10) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第14巻、215頁。
  - 11) 同上、第13巻、175頁。
  - 12) 同上、第20巻、172頁。
  - 13) 『往復書簡抜萃』第11章「論争」を参照。また、一面的な人間の危険性を指摘した第14章には次のような記述がある。「一面的な人間は自己を過信する。一面的な人間は恥知らずである」(『ゴーゴリ 14 巻全集』第8巻、277頁)
  - 14) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第26巻、107頁。下線部分は原文ではイタリック。
  - 15) 同上、第6巻、321頁。
  - 16) 『悪霊』ノートではスタヴローギンが自分の過ちを見つけられない理由として、「傲慢さ」に加え、現実に対しての「視野の狭さ ограниченность」が挙げられている(『ドストエフスキイ 30 巻全集』第11巻、152頁)。
  - 17) 『ゴーゴリ 14 巻全集』第8巻、414頁。
  - 18) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第6巻、419-420頁。
  - 19) 同上、第14巻、288頁。下線は筆者。
  - 20) 『ゴーゴリ 14 巻全集』第8巻、414頁。
  - 21) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第5巻、70頁。すでに述べたように、ゴーゴリは『往復書簡抜萃』の中で、19世紀人を支配する精神を дух гордости と呼んでいたが、гордый дух というドストエフスキイの表現は、ゴーゴリを彷彿させる。
  - 22) 桑名一博訳『大衆の反逆』白水社、1975年、158頁。
  - 23) 『ゴーゴリ 14 巻全集』第8巻、415頁。
  - 24) 同上、416頁参照。
  - 25) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第13巻、408-409頁。
  - 26) 同上、第26巻、137-138頁。
  - 27) 同上、156頁。
  - 28) 『往復書簡抜萃』第21章「知事夫人とは何者か」を参照されたい。
  - 29) 『ゴーゴリ全集』第8巻、504頁。
  - 30) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第10巻、34頁(フランスの「虫」とは、フーリエなどの社会主義的思想を指すのだろう)。またドストエフスキイは1876年の『作家の日記』の中で、ベリンスキイと並ぶ西欧主義者グラノフスキイに触れ、「彼にとってわが民衆は(…)因循姑息な、もの言わぬ大衆にすぎない」にもかかわらず、当時(1840年代)自分たちみな、彼の言葉を信じてしまったのだと述べている(同、23巻、69頁)。
  - 31) ゴーゴリはしかしながら、アカーキイ・アカーキエヴィチやチーチコフにおいて見られる「生来の」度外れの情熱、その不可解な力には神に由来するポジティブな意味があると考えていた。そしてこの「生来の」情熱は、たとえ自己の欲望に根差したものであろうとも、最終的には善の方向に変換可能だと信じた。しかし、最晩年(40

年代の終わってから 50 年代の初め) になると、彼は情熱に例外を設けなくなる。彼は自身の著 (『死せる魂』第 11 章) の余白に次のように書き込んでいる。「生来の情熱は悪であり、(…) そうした情熱は根絶すべきである」。「ここに書かれた『腐った言葉』に深い憐れみを覚える。(…) 生来の情熱の意味づけの問題に長きにわたって精力をかたむけていたために、『死せる魂』の続行が妨げられた」。( см.: Воропаев В.А. Три этюда о Гоголе (Из архивных разысканий). - В кн.: Гоголь: История и современность. Сост. В. В.Кожин, Е. И. Осетров, П. Г. Паламарчук. «Советская Россия».М., 1985. Стр.445.)

<sup>32)</sup> 『ゴーゴリ 14 卷全集』第 8 卷、265 頁。

<sup>33)</sup> 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 20 卷、172 頁。

<sup>34)</sup> 『ゴーゴリ 14 卷全集』第 8 卷、228-229 頁。

<sup>35)</sup> 同上、264 頁。

<sup>36)</sup> 同上、265-266 頁。

<sup>37)</sup> 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 26 卷、139 頁。

<sup>38)</sup> Лазарева А. Н. Духовный опыт Гоголя. «Институт Философии РАН». М., 1993. Стр.144.

<sup>39)</sup> 例外的に抑えこめない情熱があると、ゴーゴリが考えつづけていたことについてはすでに触れた (注 31 を参照)。

<sup>40)</sup> Кудрявцев Ю.Г. Бунт или религия (О мировоззрении Ф.М. Достоевского). Издательство Московского университет. М., 1969.Стр.153.を参照。クドリャフツェフはゾシマ長老の死後の腐臭に触れ、この腐臭こそが謙抑というイデーに最終的判決を下していると述べている (同、154 頁)。修道士でありながら聖なるものを端から信じない俗物ラキーチンの喜びそうな、とんでもない解釈である。腐臭は、物的証拠によらないでは聖者であるかどうかを判断できないホフラーコワたちの躓きの石となる。

<sup>41)</sup> 『ゴーゴリ 14 卷全集』第 8 卷、414 頁。

<sup>42)</sup> 松浪信一郎・飯島宗享訳『死にいたる病』白水社 U ブックス、2008 年、111 頁、下線は筆者)。「誇り」と見るか、「傲慢」と見るか、それは判断する者自身の世界観によって変わってくる。